

じような話が重なってなかった？」

T:「うんうん、どんな話聞きたい？北村先生また来年も、というかと無理かもしれない。」

D:「忙しそうでもんね。」

T:「来年は女の先生呼ぼうかと思ってるんだけどね。」

F・E:「うん、いいかもしれない。」

D:「違うことを話してもらいたいね。」

A:「牟禮さんも良かったけどね、わかりやすくて。」

D:「高校生の話ばかりだったよね。」

F:「実体験の話ばかりだったね。もうちょっと性病についての話を深くやるとか・・・。」

E:「3つの事例だったっけ？例あげてくれたけど結局は同じことになっていったよね。」

A:「北村さん。包茎の話があったでしょ？あれ重要だったよ。男子も女子も聞けるし、面白く話してくれたし。牟禮さんは、事例の話ばかりで。」

T:「長万部高校の性教育に対する意見・要望のところで、来年北村先生は呼べないけど・・・。」

A:「いいんじゃないですかね？」

T:「来年の先生には、昨年・今年とさらに深めた内容の話をしてもらおうと。Aたち、来年で最後だからね。まあ、面白い話というのはね、なかなか・・・。北村先生は特別な先生だよね。それで呼んだのね、お金かけて。」

A:「いいことだよ。長万部、性教育かなりいいと思うんだけど！生徒が取り組まないというのが現状ですからね。あんまし真剣に。」

E・F:「A、かっこいい！」

D:「かっこいいよ！」

B:「いつもと変わらない？」

T:「Aもこの2時間で大分変わったよねー。変わったというか、さっきの話じゃないけど、コソボじゃなくて・・・。」

A:「ザンビア？」

T:「そう、ザンビアのビデオを見て、 Condom をきちんとつけなきゃと言っていたし。」

A:「ザンビアには Condom ないの？」

T:「それこそ値段高いし、手に入りづらいかも。でも援助して送ればいいよね。」

A:「お金集めて！」

T:「うん、みんなでお金集めてね。」

A:「(仲間内で) 言ってた、それは！」

T:「みんなでお金集めて、ザンビアの政府に Condom どうぞって送るのがいいね。」

E:「それ、こっちにくれ！っていう感じもするんだけど。」

T:「うーん、みんなもきちんと手に入る体制を作っちゃっていかないと、妊娠だけでなく、性感染症も怖いのは確かだよ。あと2年生の要望は？講演会だけでなく、授業や担任の先生のLHR。」

D:「ビデオの方がいいよね、授業や担任の話より・・・。」

A:「話なら講演会の先生の話の方がいいよね。」

T:「なるほどね。やっぱりいいビデオを探したり、講演会のいい講師の先生呼んだりすることは必要なんだね。」(一同“うん”)

T:「やってみるワ。」

T:「それじゃ日本全体の性教育に対しての要望もこんな感じかな？」

E:「そうじゃないか？」

T:「時間がなかなかとれないというか、週に1回のロングホームルームだけじゃね。あと保健の時間、家庭科の授業、理科の授業でも取り組むことはできるんだよね。」

E:「梅ちゃん(1年生の理科担当教諭)の時とかも結構話してくれるね。」

F:「そうだね、話すね。」

(突然話題が変わり)

A:「風俗とか行ってもなんでもないの？」

T:「あー、じゃあ、その話題にしようか。」

A:「あ、すみません。」

T:「いや、いいよ。みなさん、風俗についてどう思いますか？司会はAに移ります。」(笑)

T:「え、風俗についてどう思うか、女性の立場からどうぞ。ハイ、Dから。」

D:「えー、別にいいんじゃない？」

T:「行っていることがわかってもいいやじゃない？」

D:「別に何も。」

T:「ところで風俗ってどんなものがあるの？」

A:「ヘルス。」

D:「ヘルスってどんなの？」

A:「挿入なし！じゃないの？」

T:「触るだけってこと？」

A:「なめるのもありでしょ。入れないだけ。」(一同“へえー”)

A:「俗にいう、Bだけってやつですね。」(非常にわかりやすい説明で大ウケ)

C:「俺にはわかんない。」

T:「勉強になるなー。それがヘルスなの。」

A:「わかんない、オレ。ウワサだよ。ソープは入れているという、そこの違いだっていうんだけど……。」

T:「で、Aはどうなの？」

A:「えっオレ？ソープの方がいいと思うね。入れるからじゃないよ。ソープの方が風呂とかついているし、ちゃんと洗ったり、コンドームも付けるし、安全だっていう話だよ。」

B:「行かない方がいいと思うよ。」

T:「コンドームは付けるわけ。」

A:「付ける。」

T:「で、そういうのには、愛情はどうか、恋愛じゃないよね。」

C:「欲求解消。」

T:「欲求解消だよ。うん、そういうことでOKということ？」

A:「俺はいいと思うよ。だって、そういうものがあるんだもん。」

T:「利用しなきゃソン？」

A:「あるなら行ってもいいと思うね。」

T:「男性はやっぱり愛がなくてもそういうことができるということですね。」

B:「えー、でも全部が全部そうではないよ。」

C:「できるわけないっしょ。」

A:「それは、風俗だからだよ。風俗でなかったらしてないよ。」

F:「そういう名のもとにでしょ。」

T:「ふーん、なるほど、Bはどうですか？」

B:「おれはそういうのは……。好きな人だったらするけど……。」

T:「なるほど。Bはいかないと。」

F:「A、行ったことあるの？」

A:「ううん。」

B:「なんか、あり気だよ。」

F:「絶対にありそうだよ。」

A:「エへへ。」

C:「あると。」

T:「正直に。(笑)」

A:「ないっすよ。」

F:「行きたいんだワ。」

C:「行きたがり症候群。」(笑)

B:「行ってみればいいんだって。そしてその体験談を言えばいいんだって。言ってみて変わるかもしれないから。変わるよ、何かが。」

A:「一般人の人とやったら？」

B:「ワヤ！変態。」

A:「風俗、ハマルとか言ってるよね。」

B:「それはそれでメシを食っていつてるからじゃないの？」

T:「Bは風俗へはあっても行かないなと思う？」

B:「うん。」

T:「Eは女性の立場でどう思う？例えば女性なら働く側にもなるし、愛する男性が行く可能性もあるし。」

E:「好きな人に行かれたら、ムカツク。自分が働くということでは、好きな人以外の人とやるのもいやだし、でさあ、自分の担任の先生みたいな人きたらいやだし。好きな人じゃない人が来ててもいやだし。」

B:「そうだよな。」

E:「でも別に自分に関係ない人ならいってもいいんじゃないの？」

A:「彼女がいたら行かないね。」

B:「自分じゃなかったら別にいいよ。」

F:「自分に関係なかったら別にいい。行きたいやつは行け。」

D:「風俗でしかできない人もいるんじゃないの？」

T:「あー、救済の場でもあるのかな。」

C:「壊れるんじゃないの、女の人。」

A:「風俗を相談相手にする人もいるよね。」

B:「何もしないの？」

A:「ただ話聞いてもらって終わり。」

B:「スゲー。」

T:「そういうのはあるって。大人も大変だからねー。なかなか話を聞いてくれるひとがいなくて風俗の人に聞いてもらうことね。」

D:「あった方が良くない!?なかったらレイプされる人いっぱいいると思うよ。襲われるばっかりだよ。」

C:「欲求たまって、すれ違いざまに！」

D：「働いている人だって、そこで仕事やってるんだしさ。」

F：「行きたくない人は行かないんだしさ。それでいいんじゃない？」

T：「まあ、必要に迫られてできているようなものだから、ここでダメだ！って言うてもあるわけだから。利用する人もいるんでしょうね。ただ、愛する人とか身近な人が行くのはちょっと辛いね。自分が実際お金がなくて、あそこも働く場所だから、結構高校生も就職がなくて働いている人も実は出てるんだよね。そういうのなんて、どう思う？」

E：「本当に厳しいんだったら考えるかもしれないけど・・・。」

F：「水商売って考えればね・・・。でも身体売って金はもらいたくない。」

T：「じゃ、彼が行くのは？」

F：「彼氏が行くのはいやだね。けど、それ以外の人が行くのはいいんじゃない。そういうのは行っても。働く方も生きていけるし、行く方も生きていけるでしょ。だから、いいっしょ。」

T：「Cは？男の立場で。Aが“C、行こう！”ってしつこく誘ってきたらどうする？」

C：「彼女いればいかない。いないと行く。」

T：「Aと同じだね。」

A：「でも行ってみたいね。性プロ。プロだもん。」

T：「さっきコンドームもしているって言ってたけど、病気の話も結構きくけど、どう？」

A：「ほとんどクラミジア持ってるって言ってたよ。」

T：「気にならない？残念だけど実態としてあるということについて。」

D：「絶対うつるっていう時でも行くの？」

A：「行かない、行かない。」（笑）

D：「だって行ってみたいんでしょう？」

T：「逆に、風俗のこれは男女両方いるよね。働いている人、お客さんからうつされないようになんか気を付けているみたいだね。同じだよ。」

A：「ヘルスに行けば？」

T：「同じだよ。」

D：「口かー。」

A：「そうそうー。」

T：「ま、そういうリスクもあるということね。」

E：「どっちみっちダメじゃ！」

F：「ね。」

T：「でも行きたい人も行く人もいるだろうし、Aも行くかもしれないし、いくら位かかるの、それ？」

F：「決まってるんじゃないの？」

A：「色々なところで違うよ。」

T：「安いところもある。」

T：「それじゃ、風俗の話これで終わって、援助交際の話に移ろう。援助交際をいいと思うか。」

A：「いいと思う。」

D：「エー、やだあー。」

F：「エンコーでしょ？ヤダー。絶対ダメ、ヤダ。」

T：「援助交際って、そもそもどんなものだと思う？援助交際って売春してお金もらう形もあるし、何だか色々ありそうなんだけど。」

F：「でも一番強いのはそれだよ。」

D・E：「ウン。」

T：「Cはどう思う？なんでダメ？」

C：「いいと思うよ、やるのは。」

T：「えー、さっきダメだって言ってたでしょ。」

C：「金でしょ？」

T：「お金もらうのはダメ。」

C：「どだい、好きじゃないんでしょう。」

A：「エッチする人、少ないよ。50才とかのオヤジでしょ。だからね、ただ会ってご飯食べてね、いくらとか、だよ。」

B：「それ、良くね？」

A：「だから援助でしょ、いいっすよ。オヤジが若い子と遊びたくてお金払うんですよ。若い子はお金欲しくて行くんだから、いいと思うよ、別に。」

T：「本当にそうかな。多くの援助交際って、最初はネ、ご飯食べるとか、一緒にいるだけでいいっていうことだけど、だんだんそうじゃない要求になってくるのが一般的なみたいだよ。」

B：「援交がダメって言ったら、ヘルスとかもダメでしょ。両方とも欲求が満たされるから、お金も払って。」

A：「援交ダメだ！」

T：「援交はね、セックスを与えてお金をもらうということで売春にあたるから、それがバレたら大人が処罰される。青少年健全育成条例にひっかかって。これは犯罪。」

E：「で、うちらはひっかからない？もしやったら。」

こっちはどうなの？」

T：「見つかったら？」

D：「会うだけ。」

T：「会うだけなら処分はないんじゃないかな。」

A：「お金もらったらは？」

T：「ワイセツ行為というか、セックスあるいは類似行為でお金もらったら、犯罪になるね、大人が、買った方が。ただね、ダメだと言ってもいっぱいやってる子いるわけでしょ、そのことについてどう思うか。ダメだ一と言われているのに“いっしょ、いっしょ、わからなかったら”と言ってやっている子が多いよね。」

A：「別にいいよ。」

F：「エスカレートしていくの、やだよね。」

E：「誰が考えたんだろ？」

T：「何だか、世の中お金っていうイメージ強いよね。」

D：「ねー。」

A：「世の中、お金ですね。」

E：「でもさ、お金なかったら何もできないっけさ。」

A：「そうだ。」

D：「確かにそうだ。」

A：「何だかんだ言ってお金だよ、絶対。きれいごとだよ、悪いけど、お金じゃないっていうのは。」

T：「お金も大事だけど、でもお金で性欲の処理をするとか、いや違うな、お金をもらって自分の身体を売っていうね、そこまで落ちたくないな一と思わない？あるいは、自分の彼女も落としたいと思わない？」

A：「あ、彼女やったら、殺すよ。」

F：「だってサー、援交して金もらったりすんのはいいけどさ、セックスしたりしたとするでしょ。もし自分がサ、病気になったりさ、妊娠する場合もあるかもしれないよね。気を付けてもね。それなら結局同じじゃない？」

B：「何万円だよ。」

T：「何か、C、言って。」

C：「うーん、なんか足りなくなってきた。」(笑)

B：「ニコチン中毒か？」

T：「Dはどう？」

D：「Dはエッチはいやだけど、会うくらいならいい。」

T：「“会うくらいならいい”ということの背後に

あるコワサは感じない？会って2、3回会って、その後・・・。」

D：「エー、一人では行かないと思う。」

T：「そういうテクニック(！?)を考えなきゃだめだし、大人はそう簡単に若い人にお金をくれないので、不況だし、絶対後に何かあるゾって考えながら行動するという、さっき危機感持ったでしょ？そんなに大人は甘くない。」

A・B：「ウワー。」

T：「自ら危険を引き受けることはね、気を付けないと。これからみんな卒業して札幌やあちこち出ると思うけど、色々な人たちいるから。まだ、あなた達高校生は純粹だから、“いいんじゃない、ご飯くらい一緒に食べたって”という会話は許されるんだけどね、大人はそれですまない場合が多いからね。」

D：「大人はどう思ってるの？大人はお金払って逃げられるかもしれないんだよ。」

B：「それでも大人は、そういう関係でいたいんでしょ。」

E：「そこまでやりたいんだ。」

T：「高校生はそこまであまり考えない子が多いから、割と事件も多いんだよ。」

E：「エーッ？」

T：「援助交際の事件。」

B：「エー、すごいね。」

A：「したいやつ、すればいっしょ。」

T：「もし自分の友人で援助交際している人いた時“いいんじゃない？”って流せる？」

A：「内容によるね。ただ一緒にメシ食っただけで帰ってきて何万もらったよって聞いたら、オイシィねっていうかもしれないけど・・・。」

D：「内容だよねー。」

F：「エッチしてたらねー。」

T：「結構色んな犯罪事例あるヨー。」

A：「多分、人目のつかないところに行くからだよ、多分。」

B：「そういうこと、全部考えて“いい”っていうんならいいんじゃない？」

T：「事件に巻き込まれることもあるヨ・・・と考えながら行くといいかい？(笑)」

D：「援助、援助っていうけどサー、本当の親子とかだったら失礼じゃない？“きっと援助だよ”とか言われてんだよ。(笑)」

F: 「つらいよね。」
A: 「この前、援助見たよ。あれは本物だよ。」
B: 「ウソ!」
A: 「敬語使ってたもの。」
T: 「年輩の人と女子高生? 実際いるからね。」
 (一時 中断)
T: 「さて、そろそろまとめにしようか。一人一言
ずつ言って終わりにしようか。今日はいっぱい話聞
けて楽しかった!」
A: 「先生、こんなのでいいの?」
B: 「おれ、もっとサー、深刻な話をするのかなと
思ってた。」
T: 「あ、そうなの?」
A: 「春語とかなしに、真剣にいこうと思ったんだ
けど。」
B: 「オメエ、充分方言とか使ってるべや。」
A: 「すみませんでした。」
F: 「これサ、カットしないで送ろう!」
T: 「このまま送るよ。」
D: 「他の学校、真面目にやってそうじゃない?」
A: 「“私ば”とか。」
T: 「他の学校はそうかもしれないけど、うちのう
ちでいいの。充分。」
A: 「何言われてもいいよね!」 (一同 “ウン”)
A: 「これが長万部高校です! 以上です。」
B: 「だってきれいごとってんの、バカじゃな
い?」
D: 「そうだよな。」
T: 「まだ言っていない本音を聞かせて!」
A: 「オレ、言ってるよ。」
B: 「好き放題。」
A: 「好きじゃないからやらないっていうの、はっ
きり言ってムカツクっしょ。。」
B: 「ウッソー、何で! オレはそうだよ、本当にそ
う。うん、そうだよな。なあ。」
D: 「そうだよな。なんで好きじゃない人とできる
の?」
F: 「好きじゃない人とやりたくないなあ。」
B: 「好きじゃない人とやるなんて援交と等しくな
い? ただ、金ないだけ!」
F: 「ただ単にさ、快樂を得るためにやってるサー、
ただだよな。」
B: 「そうそう。」

F: 「感じなくてねー。」
B: 「ワヤじゃない、そういうの。そういうの身近
にいるっていやだよな。」
A: 「消えませーす。絶対、迫られたらやりますよ、
皆さん。」
B: 「迫られたら? えっ、あっちから迫るって。」
D: 「だって、そんな感じにならないっしょね。」
B: 「ね。」
A: 「なんです。」
T: 「迫られたら、いや、やる人もいるかもしれな
いけど、違うな。やめろって言う人もいるよ、い
っぱい。」
B: 「絶対いるよ。A、お前、それね、自分が基準
だと思ったらダメ。」
A: 「聞いて、聞いて。オレね、10段階で。」
B: 「何言ってるかわかんない。」
F: 「何、かわいいやつ、10段階で7以下ならど
うのこうの・・・。」
B: 「何、お前、10段階で7以下なら迫られたら
断るんだべ。基準あるのか、お前。」
D: 「それじゃ、ひどいよ。」
T: 「はい、最後に今日の感想。Dから。」
D: 「感想?」
T: 「自分の思いを、このプリントに沿ってでもい
いから。結構、Dから話聞けたね。特にコンドーム。」
D: 「チガーウ!」 (笑)
T: 「コンドームがなかなか手に入らないという
のは深刻な問題だと思うよね。そのところ、何とか
解決したいね。」
A: 「コンドームじゃなくて、避妊薬ないの?」
T: 「ピルかい?」
B: 「というかさ、コンドームよりすごいのであれば
いいよね。」
T: 「避妊薬?」
B: 「もっと簡単なものがさ。」
D: 「薬あるよね。」
B: 「簡単なやつ?」
T: 「ピルでしょ?」
D: 「いや、違う。3日以内に飲むと精子が死ぬっ
てやつ。」
T: 「はいはい、緊急の避妊薬ね。」
A: 「それ、すごくない?」
E: 「それ聞いてなかった?」

T:「この前の牟禮先生の講演会の時、やったでしょ。レイプされた女生徒の事例の時に、72時間以内に病院に行ったら妊娠はさげられますヨ。警察に行く前に病院に来てくださってという話をしてくれたよね。さて、Aは？」

A:「オレですか。今日はね、とても楽しく話をさせていただきましたけどね、感想ではねー・・・。」

D:「何か言い足りない話。」

A:「言い足りない話はありませんが、今度2人で飲みましょう。それでは、さようなら。」

D:「まとまってない！」

A:「まとまってませんね。お疲れ様でした。」

T:「話の中ではね、今日、Aはかなり“アブナイ”男になってるよ。」

C:「マニアックな。」

A:「マニアックじゃないスよ。」

B:「絶対、Cよりヤバイよ。」

D:「ワーワーワー。」

A:「できますヨ。」(ちゃんと)

C:「知ってていいんじゃないの？」

T:「テープおこししてみるけど“アブナイA”だよな。」

D:「なんかねエー。」

F:「今日のAね。」

A:「お前、今日はきれいごとだべ。C、好きじゃなくても迫られたらやるべ。」

C:「うーん、彼女いたらやんないけど、それはある。」

A:「彼女いたらやんないけど。」

C:「それはある。」

T:「迫る女性についてはどう思う？積極的になっているって女子は言われているけど・・・。」(一同“うーん”)

A:「ハイ、Bは、次。」

T:「はい、今日の座談会の感想。」

B:「誰が進んでも周りが進まなければ意味ないと思う。取り巻いている・・・コンドームがもっと手に入りやすくなればいい。と言っても実現しなければ意味くない？」

D:「つうか、アメリカの学校なら売ってるんですよ。自販あるって言ってたよ。」

A:「トイレにもあるよ。カナダ行ったっけね。トイレに全部コンドームの自動販売機あるさ。」

B:「トイレ？トイレの中？」

A:「カナダの公衆便所とか駅とか空港とかも。」

B:「トイレにあるというのもちょっといやだけど。」

E:「でもサー、若い人多いんじゃない？」

T:「大事なこともね。ただ日本ってそういう意味では性に対して、何て言うのかな、神秘的なものにしたいしね。若い子がセックスに走るということに対して、不安を持ってしまう人が多いんだね。」

A:「それって、きれいごとだよな。」

T:「だから置いとくと逆に使ってしまうって失敗することを恐れるんだろうね。」

E:「そういうところで置くと、穴あいてるやつ売ってそうじゃない？(笑)」

B:「ありそうだ、何か。」

T:「日本って仏教や儒教の世界だからね。性を押さえて神秘的に思っちゃうからダメなんだよね。そんな中であって、みんなどんなふうにしていくかが課題なんだね。本当に高校生の時にセックスが必要かも含めてね。」

A:「必要だからやるということではないよね。」

B:「高校生がこう言ってるから。」

D:「聞いてないもん。」

A:「年齢とか関係ないもん。」

B:「その、父さん、母さんがどう思ってるかだよな、そういうことに対して。」

F:「そういうのはいやだね。」

T:「なぜ高校生がダメだって言われちゃうんだろうね。」

A:「あれだよ、まだ、知識がまだ足りないからだよ。」

T:「どんな知識が足りないの？」

A:「今までオレたちが勉強してきたようなことがさ。」

D:「うちらが子供産んだとするでしょ。(このスピードでいけば)その子供は、多分中学生くらいでバンバンやってると思うよ。」

F:「ウーん、やってるやってる。」

T:「このまんまいっちゃうとそうかもしれないね。それってどう思う？先生が高校生の時は、高校生がやるのは当たり前という時代ではなかったから。でも今、時代が進んできて当たり前になりつつあるしね・・・。」

E:「それ昔の考えがあるからサ。」
A:「高校生って限定されると困るサ。」
T:「ウーン、好きあっていたらセックスは・・・。」
A:「やれる身体になった時点からださ。」(一同
“あーあー”)
A:「高校生って言われると気に入くないね。」
T:「やれる身体になったらしたいと。」
B:「そういうことでもなくて。」
A:「ちょっとだけ愛が深まるでしょ、そうしたら
したいわけさ。」
F:「わかるような気がする。」
T:「本能的なものね。」
A:「本能的だね。」
T:「理性では押さえられない?」
A:「押さえる?」
B:「押さえられるよね。」
T:「いつの時代もセックスできる身体ってあった
と思うんだ。かつてのころは押さえていたんじゃない
かな。別にやらなきゃならないこともあったし、
今赤ちゃんができたらずいと思うから押さえて
きたんじゃないかな。今、その押さえがないような
気がする。」
A:「そうですね。」
T:「私たちの時にはなかった心配とか、私たちの
時代にはそんなこと悩まなかったから。ま、そうい
うこともしなかったからだけど。」
C:「すごい。」
T:「その辺をどう考えてくれるかなー。あなた達、
幸せなのか不幸せなのかわかんないなー。高校の時
って心配すること多いよね。進路のこともそうだ
し。」
F:「みんな、押さえるところ押さえてるんじゃない
の?」
E:「そうだ。」
T:「そういう人もいると。」
B:「でもそういうのって決めちゃった方が楽かも
しれないよ。何才からできるとか。」
A:「国で決めればいいよ、法律で。」
B:「だって、タバコとか酒とか決まってるけど、
そういうことはアイマイじゃない?なんか。」
A:「みんな決めちゃえばいいんだよ。」
B:「中途半端に決めちゃうのがいやだよ。酒とか
タバコだけ決まってるのが・・・。」

A:「いいこと言う、B!」
B:「オッ、ちゃんと残ってるかな、テープに!」
(笑)
T:「今、Bの話からすごく広がって。」
E:「オッ、いいなあーって。でもさっきまで黙っ
てたんだよね。」
F:「最後だけ出てきたかな。」
B:「最後のまとめをね。」
T:「法律では決められないと思うんだ。だから、
みんなで判断をして決めなさいということなんだ
よね。」
F:「そういうふうに判断して決めたことなら、親
もいいっていうんじゃないの?だったらうちとし
ては楽なんだけど。」
B:「基準が違うからさ、親と自分達が考えてるサ。」
D:「一致すればね、いいのにね。」
B:「そこまですんなどか、変なことするんじゃない
、じゃどこまでやっていいの、変なのが何なの
かわかんないから。」
F:「それがよくわかんないね。」
A:「小学校の低学年から性教育の勉強教えてもら
うのさね。」
T:「いいと思うね。」
A:「ダメだよっていうことを徹底的に教え込んだ
りしたら、いいんじゃないですかね。」
T:「なるほどね。今長万部小学校も取り組み始め
たんだよね。長万部高校だけやっているから。そし
て長万部中学校は授業でやってるし。あ、中学校の
時やらなかった?」
T:「小学校からやった方がいいって意見ね。」
A:「やってみたらどうでしょうかね。」
C:「変わんないんじゃないかな!?!」
B:「中学校のところとかやっているところあるよ。
でも変わんないかな。」
A:「いや、やっぱりそうやって教育されたら変わ
りますよね。」
D:「小学校の時の頃、子供が産まれたら素晴らしい
こととかいってるけどさ、素晴らしいこととか言
ったきながら、こうだもの、ダメー!!」(一同 ウ
ンウン)
F:「矛盾しているよー。」
D:「だから徹底的にダメなことは言っといた方が
いいんじゃない。」

T:「その方がみんなも楽だ。そういうこと悩まなくてもいいし。」

B:「Aが言ったみたいにきれいごといらないんだって。きれいごとじゃなくて、全部言ってしまった方がいいんだって。こう、なんでダメなのか、あるんだったら。」

F:「そういう理由とか、全部教えてしまえばいいんだよ。小さな時から。」

T:「なかなか避妊はできないもんなんだよ、とか？」

A:「性病は全て死ぬって教えたらいいんだよ。」
(一同 爆笑)

F:「それは間違ってるからー。」

D:「それはだめじゃない!!」

E:「でもサ、今ちょっと思ったんだけどサ、セックスってちょっとコワくない？」

F:「怖いには怖い。」

D:「ウーン、そうだね。」

E:「不安になるよね。」

C:「考えるよね。」(一同“考えるヨね”)

F:「やった後、ヤバくない?って後悔するような感じ。」

E:「生理こないやー、またかー。」

F:「ヤバイー!!とかね。」

T:「あ、E、そう感想。」

E:「みんなの意見聞けたから、ちょっとお勉強になりました。Dさんの話がね、ためになったね。」

D:「脱走!?!」

A:「そういうことがためになったのかい。」

F:「コンドームの話とか。」

E:「このメンバー6人、良かったね。意見違う人がいっぱいいたから。」

F:「そうだよ、みんな同じ意見なら座談会というか、話し合いにならないもんね。面白くないよね。」

D:「特にここが違うから。AとB。」

T:「男子3人が面白かったね、それぞれ。」

A:「あれだよ、考え方、来年になると結構変わるよ。」

C:「変わる、変わる。」

A:「オレ、昨年とは全然考え方違うもの。」

T:「どんなふうに変ったの？」

A:「昨年は本能のままに生きていたね。」

T:「ハァー、大人になったということ!?!」

A:「なったと思うね、自分で。」

D:「でも、浮気はいいとか言ってたよ。ハハ!!」
(全員“そうだ!!”)

A:「浮気じゃないさ。風俗でしょう?だから、誰とセックスしてもいいと思わない？」

F:「だめ!!」

C:「男と女と違うよ。」

A:「彼女が浮気したら殺すヨ。」

F:「でしょう!!自分は良くてさ、相手が良くないってひどい!!」

D:「でも、彼女がいたらヤバイでしょう?彼女じゃない女とやって、できたら絶対逃げるでしょう?」

A:「逃げないヨ。」

D:「絶対逃げる。責任持たないと思う。」

E・F:「絶対逃げる。」

A:「金、ちゃんと払うヨ。」

D:「最悪でしょ、こういうの。」

F:「私、A先輩の本性知ってしまった。」

B:「でも金で解決できないことあるからなー。難しいんだって、すごく。」

A:「男女交際イコールセックスでしょ、それなら。他の男と女がやっちゃダメだって言うんなら(怒っている)。」

E:「最初に戻っちゃったじゃん。」

A:「そうだよ。男女交際イコールセックスじゃないんだって。」

T:「男女交際、セックスまでいかない男女交際、いっぱいあるゾー!!」

(女子一同“そうだ!そうだ!”)

A:「男女交際していなくても、セックスしている人いるしさ、イコールセックスじゃないんだよね。」

B:「それはあるね。」

T:「ま、これは高校生の話だからね。」(笑)

A:「オレは今、彼女いないからいいけどサ。」

T:「性の問題って難しいでしょ。その人の人間性が出ちゃうしね。自分で考えて行動とらなきゃいけないから責任も重いしさ。1番難しい勉強だと思う。F、最後に感想。」

F:「いや、D先輩の話はタメになった。」

A:「いや、なりました。」

D:「いや、そんないい話したっけ。(笑)」

F:「Bの話も良かったと思う。」

D:「やっぱ、3年生だね。」
F:「でもね、Aの話にアーと思うところあるけど、ちょっと軽蔑するところが出てきた。」
E:「軽蔑する！あー、こういう人なんだ!!みたいなの。」
D:「予想とは違う!!」
F:「なんかね、違うイメージになってきたみたい。」
T:「今日、最後のまとめ。」
B:「おれ、今日Cが来るとは思わなかった。」
C:「真剣な話ができるメンバーではなかったな。深刻な話の時は泣きながら話すから。本音は8割かな。」
B:「でも今、ここが本音でしょ。あとはなってみないとわかんないこと多いから。」
A:「言ってることとやってることと違うね、実際、オレ、実際言ってることはやらないからね。」
B:「風俗行ったり?」
A:「それはしたい。しないと思うけど。まず、俺は一途だよな。」
D:「一途だよ。」
B:「ハ、格好いい!」
C:「一緒にい過ぎると飽きる。」
F:「近くても遠くてもダメっていうことかな。C、このあとゆっくり話しようね。」
C:「いいよ。」
A:「何お前ら、このあと話すって!?!」
T:「そうしたら約2時間になったと思うんだけど、みなさんの思いをザックパランに聞かせてもらったなあと思います。」
(一同 こんな話で本当にいいすかねー 雑談だヨー “すまない” というムード
→ いい子たちです。)
T:「雑談の中にも本音が入っているでしょ。あと要望のところは、もっとあってもいいけど、聞いたこともあるので、出していきたいと思います。」
T:「みなさん、どうもご苦労様でした。」(一同 “ごろうさんでした!”)

D. 結論

近年、思春期における性行動の活発化・低年齢化

による人工妊娠中絶や性感染症の増加などが大きな社会問題となっており看過できない事態となっている。わが国においても思春期のリプロダクティブ・ヘルス/ライツに対する関心の高まりはあるものの、現実には起こっている思春期の諸問題にどう向き合い、取り組んでいったらいいかという決め手を欠いている。時代の要請は、調査研究の域を脱して、①避妊実行率を増やす、②人工妊娠中絶率やSTD罹患率を減少させるために、実効の上がる科学的、具体的なソーシャル・マーケティング・プログラムを求めているといっても過言ではない。

そのような意味では、政府が平成13年度から10カ年計画で取り組む国民運動「健やか親子21」の最重要課題の一つに「思春期の保健対策の強化と健康教育の推進」が挙げられていることは時宜にあっているといえる。

「思春期総合保健対策に関する研究」は1998年に始まり3年間にわたる研究を終えるが、初年度には「思春期」へのサポートシステムを考案し、わが国における「思春期専門外来」開設の現状について調査した。調査対象者は日本思春期学会の医師会員にとどまったこともあり、その数は104施設にすぎず、都市偏在のあることがわかった。この際作成し全国関連施設に送付した『思春期のための施設ガイドブックー思春期専門外来編』は、現在も使用されておりリニューアルを求める声が寄せられている。二年度は、思春期相談を科学的効率的に実施するために産婦人科領域、泌尿器科領域、精神科領域において思春期の子どもたちとの日常的な関わりの強い専門家集団に協力を依頼し「思春期相談マニュアル」を完成させた。これは「女の子の悩み」編87項目、「男の子の悩み」編35項目、「思春期の心の悩み」編52項目の合計174項目にわたる質疑応答集である。合わせて公的な性格を帯び、公表を可とした76施設を含む『思春期のための施設ガイドブックー思春期相談施設編』をまとめた。いずれにせよ、この程度の施設数では思春期の子ども達の悩みの解決には不十分である。

国際家族計画連盟（IPPF）では若者議会（ippf/youth parliament）が開かれ、既にIPPFの中心的な意志・政策決定機関である管理委員会にメンバーの最低20%を25歳以下の若者が占めることが決定している。最終年度となった平成12年度

究では、思春期のリプロダクティブ・ヘルス/ライツについて、当事者である若者達の意見を収集することを中心に進め、思春期保健対策を効率的に進めるにあたっては、当事者を巻き込んだ検討が有効であることを再認識した。

平成13年度から国民運動「健やか親子21」がスタートするにあたり、本研究班の3年間にわたる成果が、重要課題の一つである「思春期の保健対策の強化と健康教育の推進」に活かされていくものと確信している。

E. 研究発表

1. 論文発表

- ・北村邦夫：性意識と性教育、新女性医学大系18・思春期（武谷雄二等）、363-376、中山書店、東京、2000
- ・北村邦夫：性と妊娠、小児科臨床、53（増刊号：新しい時代の小児保健活動）：231-238、2000
- ・北村邦夫：思春期と避妊相談、産婦人科治療、81(2):149-157、2000
- ・北村邦夫：思春期外来、産婦人科治療（増刊号：症状・症候からみた外来診療ガイド）、80:40-47、2000
- ・北村邦夫：現代の思春期事情、小児科診療、64(1):7-12、2001
- ・北村邦夫：思春期の性と妊娠、女性心身医学、5(2):204-208、2001
- ・北村邦夫：「健やか親子21」と思春期のリプロダクティブ・ヘルス/ライツ、日本思春期学会誌。2001（投稿中）

2. 学会発表

- ・北村邦夫・松峯寿美：若者達と語る、第19回日本思春期学会プレコンgresミーティング、東京、2000
- ・今田美智子、清水敬子、杉村由香理、北村邦夫：思春期電話相談の現状—情報源からの一考察—、第19回日本思春期学会、東京、2000

厚生科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）
分担研究報告書

中高年女性の総合的健康対策に関する研究

分担研究者 樋口 恵子（東京家政大学教授）

研究の目的と概要 本研究は平成10年度にスタートした分担研究「中高年女性の総合的健康対策に関する研究」の第3年度（最終年度）にあたり、この間の調査研究の総合的分析をまとめ、本研究テーマに係わる関係諸機関に情報提供・提言を行うことを目的としている。
今年度の樋口班の報告は、以下の3項目のサブテーマを内容とする。

研究協力者名

袖井孝子（お茶の水女子大学教授）、沖藤典子（著述業）、富安兆子（北九州大学非常勤講師）、村岡洋子（京都短期大学教授）、平野順子

サブテーマ1. 更年期における女性の自覚症状に関する国内およびアジア3国（日本・韓国・中国）の比較調査

この調査項目は、平成8年度、9年度、厚生省心身障害研究「生涯を通じた女性の健康づくりに関する研究」の分担研究「更年期における女性の健康支援に関する研究」の成果を踏まえ継承発展させたものである。

これまでに国内においては、40代、50代、60代の年代別実態の特徴および農業従事者、雇用労働者、専業主婦の就業形態別相違点が明らかになっている。平成10年度からは国際比較調査に取り組み、国内における調査票を韓国語・中国語に翻訳し、両国の研究者・研究機関の協力を得て配布。平成11年度には韓国調査の結果を発表、今年度は中国の調査結果を加えて、アジアにおける儒教圏3ヶ国の更年期の共通点・相違点を明らかにし、国内のみならず、わが国が中高年期のリスクプロダクティブヘルスについて国際協力する際の留意点を探っている。

サブテーマ2. 80代健康女性の聞き取り調査

平成11年度から「中高年女性の総合的健康対策」と

いうテーマに即して「高年期」の女性の健康調査をテーマに加わえた。21世紀は人口論的に高齢女性の比率が増大するいわば「おばあさんの世紀」であり、「高齢女性の健康こそ社会の財産」と言って過言ではない。とくに80代以上において、女性の人口は男性の2倍の比率を占める。そこで80才以上の「元気女性」に焦点を絞り、当班研究者が所属する「高齢社会をよくする女性の会」に呼び掛け、有志による聞き取り調査を行った。昨年試験調査を経て本年度は179票を回収した。

80代元気女性の意識と生活実態を明らかにすると共に、それまでの人生で何が「元気の素」と自覚されているか、当事者の認識を明らかにするものである。サブテーマ1の「更年期」をどのように経たか。最近の更年期年齢の女性にとって、子どもの「受験」と「老親介護」が大きなストレスとなっている。そこで「更年期」「介護」「食生活」「生きがい・社会参加」を分析のキーワードとして選び、80代を元気で生きる要因を追求した。

サブテーマ3. 病気とジェンダー—女性が病気になったとき—

3年間の研究を終わるにあたって、サブテーマ1、サブテーマ2のこれまでの研究から浮かび上がってきたサブテーマ3「病気とジェンダー」を付け加えた。

加齢にしたがって、どのように健康を心がけようと一定期間疾病・障害と共に生きる可能性が高くなる。

「一病息災」「多病息災」は男女にかかわらず高齢期を生きる時のモットーであろう。しかし、同じ疾病に罹ったとしても、男女によって家庭内の地位と役割の違いから家族の対応が異なり、ときには医療機関においても違った取り扱いを受けることを私たちは経験的に実感してきた。

サブテーマ1の調査研究に携わることにより、更年期障害における家族とくに夫の対応の問題点が浮かび上がってきた。一方「高齢社会をよくする女性の会」が1987年、1997年の2回にわたって行なった「女性の視点から一家族介護についての実態調査」から、家族の介護者として重い負担を担う女性は、疾病の自覚症状があるにもかかわらず医療機関にアクセスできない事実が明らかになった。女性とその家族内で担う役割の大きさゆえに、医療・保健へのアクセスが制限されている。

私たちは女性の「生涯にわたる健康」に影響を与える重大なテーマとして、「病気とジェンダー」について、現状の把握と問題点の整理を行うことにした。先行研究のヒアリングと資料（新聞）・雑誌等の関連記事でテーマに関する具体的体験が語られたもの）の整理を行い、主として「高齢社会をよくする女性の会」会員を対象に、自分自身の病気体験について自由記入で回答を求め、106通を集めた。質問は「家族の中で」「医療の場で」と2つの場面に分けた。当研究班としては最終年度のみのおさやかな試みであるが、「生涯にわたる女性の健康支援」の視点から、健康の危機である疾病時の女性の問題点を分析、問題提起したものである。

更年期意識調査——日本・韓国・中国における調査結果の分析

袖井 孝子（お茶の水女子大学教授）

協力：平野 順子

1 目的

本稿の目的は、東アジアに位置し、文化的な共通性をもつ日本・韓国・中国における中高年女性を対象とした調査結果を分析し、更年期に対する意識、自覚症状、更年期において直面する問題などが三カ国においてどのような共通点と相違点を示すかを明らかにするところにある。

分析の対象となるデータは以下の通りである。

① 日本

調査時期 1997年9月から11月

調査方法 自記式調査。全国各地の「高齢社会をよくする女性の会」会員、および自治労などの労働組合を通じて調査票を配布。

回収1,584票のうち、分析に用いるのは不能票を除く1,286票。

② 韓国

調査時期 1999年10月26日から11月5日

調査方法 ソウル市における面接調査。小中学生の母親、社会福祉センターや生涯教育への参加者および保険会社従業員、団地居住者などを対象。調査には韓国女性開発院の研究員であるDr. Jung Eun Park とDr. Yeong-Ran Park、および3人の研究助手によって行われた。分析に用いるのは不能票を除く521票である。

③ 中国

調査時期 1999年10月15日から11月1日

調査方法 北京郊外の石景山区における面接調査。血圧検査に訪れた女性を対象。調査の統括は北京大学人口研究所Zheng Xiaoying教授が行った。分析に用いるのは不能票を除く1,108票である。

集計は、お茶の水女子大学袖井研究室において、SPSS統計パッケージを用い、教務補佐員平野順子が行った。

本調査は、サンプル選定の方法や調査の方法が異なるために、厳密な比較は困難であることを予め断って

おきたい。韓国や中国では文盲の者や調査に慣れない者が少なくないため、日本のように自記式調査をすることは不可能である。また、中国では調査員の質に問題があるのか、あるいは対象者が調査されることに慣れていないためか、誤って回答をする者もかなり多かった。

2 対象者の基本属性

①年齢

対象者の年齢は表1に見られるように、日本では50～54歳が22%でもっとも多く、55～59歳の20%、60～64歳の14%、65歳以上の12%の順になっている。韓国では44歳未満が35%でもっとも多く、45～49歳の24%、50～54歳の17%、60～64歳の11%、55～59歳の10%の順であり、65歳以上は4%にすぎない。中国では、45～49歳の36%がもっとも多く、ついで50～54歳の22%、44歳未満の17%、55～59歳の9%、65歳以上と60～64歳の8%の順になっている。要約すれば、日本の対象者は高齢に偏り、韓国の対象者は若年に偏り、中国はその中間ということになる。

②学歴

最終卒業校は表2にみられるように、日本では高校卒が3割でもっとも多く、ついで大学卒が2割強、専門学校卒が16.7%、短大卒が13.4%であり、大学院卒が0.7%を占め、同年齢層に比べて高学歴者が多いといっていよう。韓国では、年齢が若いいためか、日本よりもさらに学歴が高く専門学校卒が4割弱、大学卒が4分の1にのぼる。中国では中学卒が24%でもっとも多く、専門学校卒が22%、短大卒が16%、高校卒が15%だが、大学卒業以上が7%を占める一方で、小学校卒業以下が15%を占めることが注目される。ただし、各国における教育制度が異なるために、単純な比較は避けるべきだろう。

③配偶関係

配偶関係は表3にみられるように、有配偶は日本がもっとも少なく79%、次いで韓国84%、中国87%であ

る。単身者の内訳は、未婚は日本では35%だが、韓国13%、中国12%。離別は日本22%、韓国25%、中国30%。死別は、日本43%、韓国61%、中国58%で、死別がもっとも多いが、第2位は、日本では未婚だが、韓国・中国では離別である。

④子どもの人数

表4にみられるように、日本と韓国では2人がもっとも多く、それぞれ5割前後だが、一人っ子政策をとる中国では1人が6割近くを占める。3人以上は、韓国がもっとも多く27%、次いで日本21%、中国15%である。

⑤家族形態

表5にみられるように、日本では夫婦のみが26%で最も多く、夫婦と未婚子がそれに次いで25%だが、韓国と中国では夫婦と未婚子の核家族が、それぞれ64%と52%で最も多い。三世帯世帯は中国では4分の1近くを占めるが、日本と韓国では、それぞれ4%と6%にすぎない。単身世帯は、日本がもっとも多く1割を超えるが、韓国と中国は5%程度である。日本の対象者が高齢に偏っていることを考えると、日本では高齢者世帯においても核家族化やシングル化が進行していることは明らかである。

3 職業経験

表6にみられるように、職業経験のある者は、どの国でも9割前後を占める。現在就業中は、韓国がもっとも多く70%、次いで中国64%、日本56%であり、過去に就業したことのある者は日本がもっとも高率で36%、次いで中国27%、韓国17%となっている。

現在就業中の者の就業形態は、表7にみられるように、どの国も雇用で正社員がもっとも多く、中国では9割を超えるが、日本では44%、韓国では37%である。日本では雇用でパートが20%でそれに次いでいるが、韓国では自由業の36%が第2位を占めており、両国における産業化の進展の相違を反映している。

現在の仕事をずっと続けてきた者は、中国が92%で最も多く、次いで日本61%、韓国54%である。現在の収入が大きく生活を支えている者は、中国98%で最も多く、次いで韓国79%、日本66%である。

4 更年期に対する意識

①更年期はいつか

表8にみられるように、「更年期は終わった」は、日本33%でもっとも多く、中国と韓国は2割前後である。「更年期真っ只中」は、中国37%でもっとも多く、次いで日本27%、韓国21%である。「まだこれからで分からない」は、韓国が28%でもっとも多く、次いで日本20%、中国18%。「更年期などなかった」は、韓国が32%でもっとも多く、日本と中国は2割前後である。

②更年期についてどう感じるか

表9にみられるように、三カ国とも、「更年期が終わった者」ほど肯定的に受け止め、「真っ只中」と「これから」の者ほど否定的に捉える傾向がある。日本では、「終わった」では「解放感」が6割近くを占めるが、「真っ只中」では「老いの入り口」が35%でもっとも多い。韓国では、「老いの入り口」をあげる者がもっとも多く、「終わった」者では「解放感」がそれに次ぐが、「真っ只中」では「女でなくなる」が22%を占める。中国では、「老いの入り口」がもっとも多く、「解放感」が第2位を占め、「真っ只中」では「女でなくなる」が2割と、他よりも多くなっている。日本では更年期を肯定的に受けて止め、韓国では否定的に受け止める傾向があるといつてよいだろう。

5 更年期の症状

以下については、更年期経験者（「終わった」と「真っ只中」の者）を分析の対象とする。まず身体症状についてみると、表10にみられるように、どの国においても、「のぼせ、ほてり、発汗」をあげる者がもっとも多く、次いで「めまい」「動悸」「肩こり」「腰痛」「頭痛」「関節痛」「性欲減退」をあげる者が多い。日本では、「冷え」と「性交痛」をあげる者が相対的に多く、韓国では「月経の量が多くなった」が相対的に少なく、中国では「月経期間の延長」が相対的に多くなっている。しかし、全体的な傾向は、三カ国とも共通しており、更年期における身体症状にはほとんど差がないとみてよいだろう。

身体症状に比べると、精神症状には国による差が大きく、表11にみられるように、「何もなかった」が日本では23%と他に比べて多くなっている。もっとも訴えの多いのは中国であり、「イライラ」は65%にのぼる。「うつ状態」「不眠」「眠りが浅い」「無気力」などについても、他に比べて高い比率を示す。これは、

中国における調査が、血圧検査に訪れた女性たちであったため、症状に対してより敏感に反応したということも考えられる。韓国では、他に比べて「不安感」をあげる者が多く、更年期を否定的に捉える者の多いことを反映している。

6 治療について

表12-1にみられるように、日本と韓国では「どこへも行かなかった」が6割弱でもっとも多いが、中国では「医療機関」が過半数を占める。かかった診療科は、表12-2にみられるように、産婦人科と内科に集中している。「どこへも行かなかった」理由は、表12-3に示されるように、日本では「行く必要がなかった」が66%でもっとも多く、韓国・中国では「行く発想がなかった」がそれぞれ47%と58%を占める。

訪ねた医師の数は、表12-4にみられるように、1軒がもっとも多く、日本53%、韓国64%、中国71%であり、日本では2軒以上訪ねた者が多くなっている。一番多くかかった医師の性別は、表12-5にみられるように、日本と韓国では男性が圧倒的に多いが、中国では女性が9割を超える。更年期に対する医師の理解は、表12-6に示されるように、「おおむね適切」がもっとも多いが、「診断が正しくなかった」が韓国と中国では約2割、「不親切」が中国で1割を占める。ホルモン療法については、表12-7にみられるように、「受けた」は日本がもっとも高率で29%、次いで韓国18%、中国16%。「受けない」は日本が54%、「受けたい」が韓国56%、「知らなかった」が中国55%とそれぞれの国で集中する項目が異なる。日本におけるホルモン療法への否定的な態度はどこから来ているのだろうか。

7 相談相手

一番親身になって相談に乗ってくれた相手は、日本では「女の友人」が33%でもっとも多く、夫の17%がそれに次ぐ。しかし、「誰にも相談しなかった」が4分の1近くを占めることが注目される。韓国では「女の友人」29%、「夫」20%「娘」12%の順である。中国では、「夫」が62%で、他に比べて3倍以上の高率である。次いで「娘」28%、「女の友人」24%、「職場の同僚」17%で、中国におけるネットワークの緊密性と、それに対する日本の希薄性とが目立っている。

8 閉経後の性生活

日本では「解放感」が31%でもっとも多く、次いで「セックスへの意欲減退」が23%、「回数減少」が20%、「性交痛」16%、「以前と同じ」15%の順になっている。韓国では、「意欲減退」が25%でもっとも多く、次いで「以前と同じ」と「仕方がない」がそれぞれ18%、「回数減少」が15%で、「解放感」をあげる者は12%にすぎない。中国では「回数減少」が29%でもっとも多く、次いで「意欲減退」26%、「解放感」25%、「以前と同じ」20%、「仕方がない」12%の順である。総じて、日本がもっとも肯定的であるのに対して、韓国ではもっとも否定的である。

9 夫との関係

「更年期の理解」「妻への思いやり」「家事手伝い」「話し相手」の4項目をあげて、夫との関係を調べたところ、表15に明らかなように、肯定的な回答が中国では7,8割を占めるのに対して、日本では6割前後、韓国では4~6割とやや否定的である。韓国では、どの項目についても「全然ない」が1~2割を占めることが注目される。

10 更年期の頃抱えていた問題

表16に示されるように、どの国においても、子どもに関する問題がもっとも多く、受験、恋愛・結婚、独立、結婚の遅れなどが悩みの種になっている。その一方で、自分や夫の親の介護をあげる者も1~2割を占め、更年期の頃が、子どもの問題と親の問題の両方に直面する、いわばサンドイッチ世代であることを示している。仕事の多忙さや職場の人間関係など仕事にまつわる悩みをあげる者も多い。その他、「老後の生活設計」や「住宅の購入・増改築」など老後生活の安定に関わる悩みも少なくない。

相違点として、日本では「夫は仕事一筋」をあげる者が相対的に多い。韓国では「子どもが自立しない」と「夫の定年・リストラ」をあげる者が多く、IMF体制下にある韓国の経済情勢の厳しさが伺われる。中国では、「子どもの恋愛・結婚」「夫の病気」「住宅の購入・増改築」が他に比べて多くなっている。

11 更年期対策

表17にみられるように、「更年期を乗り切る上でよかったこと」は、三カ国とも「毎日の充実」「趣味」「友人」「経済力」「休息」をあげる者が多く、もっとも比率の高い「毎日の充実」はどの国においても5割を超える。相違点としては、日本では「女ではなくなったと思わない」と「特別に努力しなかった」が他よりも多くなっている。それに対して、韓国では「ホルモン療法」をあげる者が多く、中国では「夫の共感」「子どもの共感」といった家族関係の良さ、および「医療機関」「相談機関」のような社会資源に恵まれることをあげる者が相対的に多くなっている。

更年期を健やかに過ごすために必要な対策としては、表18に示されるように、三カ国とも「女性自身が正確な知識をもつ」ことを支持する者がもっとも多く、とりわけ日本と中国では7割を超える。次いで「更年期をプラスのイメージでとらえる社会意識づくり」「相談機関の充実」があげられている。日本と韓国に多く、中国に比較的少ないのは「情報提供」であり、日本と中国に多く、韓国に少ないのは「医療関係者の認識」「人材の育成」「男性への研修・教育」である。中国に目立って多いのは、「総合的機関の設置」「更年期休暇」「労働条件の改善」である。総じて、中国ではほとんどどの項目に対しても回答率が高いが、韓国ではその比率が低く、日本はその中間に位置する。こうした傾向は、更年期問題への関心の相違を反映しているのだろうか。

12 仕事と更年期

更年期中の勤務形態は、表19-1にみられるように、フルタイムがもっとも多く、中国83%、日本64%、韓国42%となっている。パートは日本21%、韓国25%だが、中国ではわずか8%。韓国では雇用者でないものが3割弱を占める。職場での地位は、「管理職ではないが責任が重い」がもっとも多く、日本45%、中国30%、韓国26%である。管理職は日本27%、中国23%、韓国12%で、職場においてかなりの重責をおっている者が少なくないことが推測される。

更年期中の仕事の特徴としては、表19-3に示されるように、三カ国とも「身体を使うもの」「長時間労働」「責任が重い」などをあげる者が多い。日本では「職場の人間関係」をあげる者が他に比べて多いが、

「働き方が不規則」をあげる者は少ない。韓国では、「働き方が不規則」「職場の人間関係」「仕事以外の忙しさ」をあげる者が相対的に多い。中国では「身体を使うもの」「働き方が不規則」など労働の厳しさを訴える者が多く、「男性よりも賃金が低い」「責任あるポストが与えられない」など処遇上の不満の声が高い。

表19-4によって、仕事中的精神状態を見ると、中国がもっとも肯定的であるのに対して、韓国はもっとも否定的である。中国では、「仕事が楽しい」「仕事に満足」「達成感」「仕事を通じての人間関係」「仕事を理解してくれる家族・友人」などの支持率が三カ国中もっとも高い。その一方で、「ストレスが多く忍耐」も3割を超えてもっともその比率が高い。韓国では、「能力や体力に不安」「こんな仕事で一生を終わるのか」「家庭との両立不安」などの支持率が三カ国中もっとも高く、仕事に対する不安、不満、および自信のなさを伺わせる。日本はほぼ中間であるが、「家庭との両立不安」をあげる者がもっとも少なく、韓国20%、中国15%に対して、日本は7%にすぎない。

13 要約と考察

1) 更年期については、「更年期が終わった」者ほど肯定的に受け止め、「真っ只中」と「これから」の者ほど否定的に受け止める傾向がある。三カ国を比較すると、更年期に対しては、日本がもっとも肯定的であり、韓国がもっとも否定的である。更年期＝女としての盛りの終了という意識が、韓国ではかなり強いように見うけられる。

2) 更年期の身体症状については、どの国においても「のぼせ、ほてり、発汗」をあげる者がもっとも多く、次いで「めまい」「動悸」「肩こり」「腰痛」「頭痛」「関節痛」「性欲減退」をあげる者が多い。身体症状については、三カ国とも近似した傾向を示している。

3) 精神症状については、国による差があり、日本では「何もなかった」が4分の1弱でどの国よりも高率である。それに対して、もっとも訴えの多いのが中国であり、「イライラ」をあげる者が3分の2にのぼる。韓国では、「不安感」をあげる者が相対的に多く、更年期の否定的な捉え方を反映している。

4) 治療については、日本と韓国では「どこへも行かなかった」がもっとも多いが、中国では「医療機関」が過半数を占める。「行かなかった」理由は、「精神症状が何もなかった」者の多い日本では、「行く必要がなかった」が3分の2を占めるのに対して、韓国と中国

では「行く発想がなかった」が5～6割を占める。

5) 治療を受けた医師は日本と韓国では男性が圧倒的に多いが、中国では女性が9割を超える。医師に対する不満がもっとも高いのは中国である。

6) ホルモン療法を受けた者は日本が3割、韓国と中国は2割弱。日本では「受けない」が5割を超えるが、韓国では「受けない」が6割弱、中国では「知らなかった」が6割弱と対比をみせている。日本においてホルモン療法への希望が少ないのは、おそらく必要性が高くないこと、および副作用への懸念によるものと思われる。

7) 親身に相談にのってくれた人は、日本と韓国では「女の友人」が3割でもっとも多いが、中国では「夫」が6割を超える。日本では「誰にも相談しなかった」が4分の1を占めているのに対して、中国では「娘」「女の友人」「職場の同僚」など相談相手としてあげられる人が多く、日本女性の孤立化と中国女性のネットワークの広さが対照的である。

8) 閉経後の性生活については、日本がもっとも肯定的であるのに対して韓国はもっとも否定的である。しかし、「意欲減退」をあげる者は、どの国においても4分の1を占めることは興味深い。

9) 更年期に対する夫の理解があるのは、中国、日本、韓国の順であり、韓国では「全然ない」という者の比率が相対的に高い。

10) 更年期の頃抱えていた問題は、子どもの問題と親の介護というサンドイッチ世代であることに加えて、自身の老後生活の安定に関連する問題にも直面しており、更年期が悩みの多い時期であることを示している。さらに日本では「夫が仕事一筋であること」が、韓国では「夫の定年・リストラ」が、中国では「夫の病気」が悩みの種になっていることが注目される。

11) 「更年期を乗り切る上でよかったこと」では、三カ国とも「毎日の充実」をあげる者がもっとも多い。日本では、「女ではなくなったと思わない」と「特別に努力しなかった」が、韓国では「ホルモン療法」が、中国では家族関係の良さや社会資源に恵まれたことをあげる者が相対的に多くなっている。いずれにせよ更年期に体験する身体症状や精神症状を軽減してくれる、あるいは忘れさせてくれるものが必要であること確かである。

12) 更年期対策としては、三カ国とも「女性自身が正確な知識をもつ」という女性のエンパワーメントをあげる者がもっとも多い。それに次いで、「更年期をプラスのイメージでとらえる社会意識づくり」「相談

機関の充実」があげられており、自助努力の次には、社会的な対応策が不可欠であることを示している。中国では、「更年期休暇」「労働条件の改善」への要望が高く、フルタイムで働く、あるいは働かざるをえない中国女性にとって労働の場における配慮の必要性が高い。

13) 更年期中に仕事に就いていた者の多くは、かなり責任のある地位を占めており、更年期による心身症状に加えて仕事によるストレスが負担となっていることが推測される。仕事に対する満足感中国がもっとも高く、韓国では、仕事に対する不安や不満が高い。これは、両国における女性の就業状況と労働の場における女性の地位を反映しているものと思われる。

三カ国には、共通する点が多いが、相違点も少なくない。相違点の多くは、それぞれの社会における女性の地位や役割を反映している。更年期に対する肯定的な受け止め方は、閉経が女としての価値の喪失にはつながらないことを示しているし、逆に否定的な受け止め方は閉経によって女としての魅力が喪われるという思いこみによるものであろう。

だが、更年期に対して、もっとも肯定的な日本女性が、必ずしも恵まれているとは言いきれない。彼女たちは、相談相手も社会資源も乏しく、もっぱら独りで頑張る自助努力型であり、夫を始めとする家族の理解と社会資源に恵まれている中国女性とは対照的である。

一時点における構造化された調査票を用いた調査——いわゆる横断的な調査——によって捉えられる事象には限界があることは言うまでもない。しかし、これまでに更年期に関する国際的な比較調査は皆無といっても過言ではない。本調査はあくまでも探索的なパイロット・スタディである。今回の調査を通じて形成された協力関係を手がかりに、今後さらなる調査研究を深めていきたいと考えている。

基本属性

表1 年齢

	～44歳	45～49歳	50～54歳	55～59歳	60～64歳	65歳～	不明
日本(n=1286)	7.1	18.0	21.9	19.5	13.8	12.3	7.4
韓国(n=521)	34.9	23.6	16.9	10.2	10.6	3.8	…
中国(n=1108)	16.7	35.7	21.8	9.2	8.1	8.2	0.3

表2 学歴

	小学校以下	小学校	中学校	高校	旧制高等女学校	専門学校	短大	大学(旧制専門学校を含む)	大学院以上	不明、NA
日本(n=1286)	…	…	4.5	29.5	4.8	16.7	13.4	21.9	0.7	8.5
韓国(n=521)	…	1.7	9.6	16.7	…	38.3	6.3	25.3	…	1.5
中国(n=1108)	6.9	8.4	23.8	15.1	…	22.3	15.9	6.9	0.4	0.5

表3 配偶関係

	有配偶	単身	不明	単身の内訳			
				未婚	離別	死別	不明
日本(n=1286)	79.4	17.7	3.0	34.8	22.3	42.5	0.4
韓国(n=521)	83.9	15.9	0.2	13.3	25.3	61.4	…
中国(n=1108)	86.8	13.2	…	11.9	30.4	57.8	…

表4 子どもの人数

	なし	1人	2人	3人以上	不明
日本(n=1286)	11.7	16.7	48.7	20.5	2.5
韓国(n=521)	1.9	16.3	53.4	27.1	1.3
中国(n=1108)	2.9	57.5	23.7	14.5	1.4

表5 家族形態

	単身	夫婦のみ	夫婦と未婚子	夫婦と子ども夫婦(孫を含む)	自分または夫婦と親	その他	不明
日本(n=1286)	11.0	25.9	25.3	4.3	9.8	22.5	1.2
韓国(n=521)	5.0	8.4	63.5	5.8	3.9	7.5	1.2
中国(n=1108)	5.3	13.2	52.3	23.0	4.8	0.4	1.0

職業経験

表6 職業経験

		日本 (n=1234)	韓国 (n=511)	中国 (n=1096)
あり	現在就業中	56.4	69.1	64.2
	過去に就業	36.2	17.4	27.1
なし		7.4	13.5	8.7

表7 就業経験

	雇用で正社員	雇用でパート	自営業 (農業を除く)	自由業	その他
日本(n=823)	44.2	19.9	8.6	5.3	22.0
韓国(n=365)	36.7	4.9	9.6	35.9	12.9
中国(n=685)	93.2	4.5	0.9	1.0	0.4

表8 更年期はいつだと思うか

	日本 (n=1245)	韓国 (n=507)	中国 (n=1099)
更年期などなかった	19.7	32.0	22.7
更年期まっ只中	26.9	21.3	37.1
更年期は終わった	33.1	18.9	21.3
まだこれからで分からない	20.3	27.8	18.1

表9 更年期についてどう感じるか

日本

	更年期は なかった (n=155)	更年期 まっ只中 (n=277)	更年期は 終わった (n=330)	まだこれ からで分 からない (n=197)
A ほっとした解放感を持つ	55.5	31.8	56.7	25.4
B 女でなくなったという複雑な思い	16.7	13.1	17.7	20.7
C 老いの入口で淋しさを感じる	20.9	35.0	23.5	39.6
D 夫に相手にされないのではと思う	1.5	2.7	2.1	2.6
E 社会一般から女性扱いされないのではと思う	3.0	3.0	2.4	3.5

韓国

	更年期は なかった (n=156)	更年期 まっ只中 (n=107)	更年期は 終わった (n=88)	まだこれ からで分 からない (n=138)
A ほっとした解放感を持つ	11.8	11.5	21.3	9.3
B 女でなくなったという複雑な思い	13.5	22.4	17.0	11.6
C 老いの入口で淋しさを感じる	31.6	50.0	44.1	34.3
D 夫に相手にされないのではと思う	11.3	12.0	9.1	9.4
E 社会一般から女性扱いされないのではと思う	10.8	19.8	8.7	12.2

中国

	更年期は なかった (n=142)	更年期 まっ只中 (n=246)	更年期は 終わった (n=155)	まだこれ からで分 からない (n=118)
A ほっとした解放感を持つ	24.7	29.2	34.4	17.6
B 女でなくなったという複雑な思い	8.5	20.3	9.7	11.0
C 老いの入口で淋しさを感じる	28.0	44.2	44.0	42.6
D 夫に相手にされないのではと思う	5.0	12.3	13.0	8.2
E 社会一般から女性扱いされないのではと思う	3.6	5.0	1.4	1.9